



阪神・淡路大震災による場所の喪失と場所への愛着 ： 複線径路・等至性モデル (TEM) による分析

木嶋, 恭子

(Citation)

兵庫地理, 62:39-58

(Issue Date)

2017

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004014>



阪神・淡路大震災による場所の喪失と場所への愛着

—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析—

木嶋 恭子

1 章 序論

1. 研究目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災による場所の破壊の様子は記憶に新しい。巨大な津波に多くの建物が飲み込まれ、一瞬のうちに人々の生活の場は、更地になってしまった。日本は世界的に見ても地震が多い国であるが、同時に、その他の自然災害も多い国である。自然災害が起こるたび、誰かにとって大切な場所は破壊されている。それに加え現代においては、再開発等で、場所はめまぐるしく変化している。人間が愛着を抱いている場所は常に変化の危機にさらされているのである。では、愛着を抱いている場所を喪失した際、人間はどのような過程を経てその事実を受容していくのか。そして、その際、喪失した場所に対して人間が抱いていた愛着は、どのように人間に影響するのか。また、「場所への愛着」という概念は、現代においてどのように再考されるべきか。これらが本稿で主として明らかにしたいことである。

震災による所有物の喪失の際、どのような感情を抱くかについては池内ほか(2000)がある。失ってしまったからこそ、本当に大切であったものや大切さの真の理由が見えるとして「喪失」という観点を取り上げているが、これは「本当に大切」だということを示している。また、喪失を自発的な喪失と非自発的な喪失の2に分け、後者を検討対象としている。そこには自主的な廃棄、処理、処分といった自発的な喪失では、それに伴う心的外傷は存在しないが、窃盗や被災等、主体が意図せざる喪失である非自発的な喪失ではそれに伴う心的外傷が存在するというBelk(1988)の考えが背景にある。筆者は、同様のことが場所についてもあてはまるのではないかと考えた。

2000年代に入り、震度7¹を記録する大震災が多発しているが²、戦後、阪神・淡路大震災の発生まで、日本では震度7を観測し、大きな被害をもたらす大地震に見舞われたことはなかった。本稿では、場所の喪失経験として1995年に発生した阪神・淡路大震災を取り上げるが、それは場所の喪失からの時間経過に主眼を置き、場所の喪失の受容過程と場所への愛着の関係性を検討するためである。また、調査対象者のサンプリングにあたり、神戸市長田区を調査対象者の共通項とした。神戸市長田区が、神戸市の中でも甚大な人的被害、建造物の被害を受けた地域のひとつであり、さらに火災で多くが焼失したということが大きな理由である。また、木造家屋の長屋が並ぶ下町であった神戸市長田区は、震災以前非常に活気のある地域のひとつであったが、神戸市の復興政策により、その姿を大きく変えている。そのことも調査対象者の共通項とした理由のひとつである。

2. 本稿の構成

2章では場所と愛着について、人文地理学の場所に関する研究史と心理学の愛着理論を整理したうえで、場所への愛着に関する研究の変遷を追う。3章では複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) について説明し、調査対象者の語りの内容の分析、考察をする。4章では、先述した論点に対する結論を提示し、残された課題、今後の展望と限界について述べる。

2 章 場所と愛着に関する研究史

1. 人文地理学における場所の研究史

地理学において「場所 (place)」をテーマとした議論が始まったのは、計量地理学に警笛を鳴らす形で登場した人文主義地理学においてである。遠城

(1998) は、場所を捉える立場として、人文主義地理学的立場、マルクス主義地理学的立場、その両方の要素を備えた立場の3つをあげた。その3つ目の立場とは、「場所」がもつ個別性や差異が分析の上で重要であると考えながらも、「場所」をアイデンティティの拠点としてのみ、あるいは資本循環のための不可欠な手段のひとつとしてのみ、決定論的に理解するのではなく、個人や集団間の対立と協同を含んだ条件依存的な出来事の契機の間として捉える」ものである。

同様に両義的な場所について議論した滝波(2005)は、「ジオ・ポリティック(空間の社会的・政治的な表現)」と「ジオ・ポエティック(空間の詩的・美的な表現)」を以て、「風景は主観か客観かといった問題や、個人か社会かといった問題」を乗り越えようとした。また、相澤(2008)は、可知的・可視的な世界を捉えようとした人文主義地理学における場所と、権力性や資本のメカニズムが作用する場所は、互いに相容れない概念ではなく、むしろ主体的に捉えられた現象学的な世界としての場所と資本の作用や関係論的に捉えられた場所を架橋しながら、場所を理解する枠組みが必要であると述べている。そして、場所を、主体により知覚された「現象学的世界」であると同時に、可視的・不可視的な構造や力学・関係が作用する場でもあり、そのような作用により社会的に構築された存在であるものとして定義している。

このように、場所は個人的なものであると同時に、社会的なものでもあるという両義性をもつものとして議論されてきたが、Massey(1993)は、場所観念の問題を、場所が単一の本質的なアイデンティティを持つという見方、また場所に境界を設けてしまうことに由来するものとした。そこで述べられる場所の解釈は、場所は静態的なものではなく、閉じた領域、すなわち固定的な領域やアイデンティティを持たないとするものである。また、熊谷(2013)は、「場所」を、「空間的な近さによって生み出される人と人、人と事物、事物と事物の関係性の束」と定義している。これらは、場所についての議論が起こったときには想定されていなかったグローバル化

という現象を踏まえた議論である。

近代以降、主体としての個人は移動するものとして捉えられてきた。そして、地表をそこに棲む人間があつてはじめて地理的世界となるものとして出発した人文主義地理学を始点とする場所の議論は、いまや場所そのものが固定的な領域性を持たないものと認識されるまでに至った。しかし、いかに時間や空間が圧縮され、人間が特定の地表に棲み続けなくなったとしても、人間の生活はどこかの地表上で繰り広げられるのであり、固定的な領域を持っているのである。したがって、現代においても、「場所」は人間にとって個別的なものであると同時に、固定的な領域に由来するものであると筆者は考える。また、場所を形作るのは、個人であり、かつ、社会であるという両義性を考慮に入れたものとして、場所を捉えたいと考える。

2. 心理学における愛着理論

「場所(place)」についての議論を始めた人文主義地理学においては、認知、感情、記憶等の主観性に焦点があてられてきた。その後の場所の議論を踏まえても、場所に対する人間の主観性は一定の意味を持っていると言えるのではないか。では、人間の心理について研究する心理学において、そのような主観的感情のひとつである「愛着(attachment)」の理論は、どのように理解されてきたのか。

心理学における愛着理論は、「母-子」の関係を開始点とした。心理学において、愛着の意味を人間が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき(emotional bond)とするものは多く(遠藤, 2005)、愛着理論の提唱者である Bowlby(e.g.1988)もそのように記述している。しかし、Bowlby(1969)は当初、ここまで広義のものとして愛着を位置付けていなかった。愛着概念の始点は、危機的な状況や、またそういった危機的な状況に備え、特定の対象との近接性を求め、維持することにより自らが「安全であるという感覚(felt security)」を確保するためのものという認識であった。その後、愛着を人と人との情緒的な絆とみなし、ネガティブな情動のために存在するものではなくポジティブな情動をも含むも

のへと解釈が拡大していった。

しかし、Goldberg et al. (1999) のように、恐れや不安が起こる心理的状态において、自分が誰かから「保護してもらえるとということに対する信頼感 (confidence in protection)」こそが愛着の本質的要件であり、それが人間の健全な心身発達を支えるものであるとして、Bowlby (1969) が提示した原義へ立ち返るべきであるという主張も存在する。このことになれば、ある個人にとって主要な愛着対象は、危機が生じた際に逃げ込み保護を求める「確実な避難場所 (safe haven)」であると同時に、ひとたび情動が静穏化したときには、そこを拠点として外界に積極的に出て行くための「安全基地 (secure space)」として機能することになる (遠藤, 2007)。これは安全基地仮説とされるが、子どもは親によって守られ、慰められていると感じていると、まわりを探索することができるというものである。

また、Bowlby (1977) は、愛着理論の提唱にあたり、人間の乳幼児や子サル等の行動観察をしたが、愛着は乳幼児期だけに影響を与えるのではなく「揺りかごから墓場まで」、つまり、生涯存続し、影響を与え続けるものとして仮定している。そこでは、他者との近接関係を維持するというを、単純に距離的に近い位置に居続けるということだけではなく、物理的に離れていても特定対象との間に相互信頼に満ちた関係を築くことも捉えている。いずれにせよ、危機が訪れた際には、その愛着対象から助けってもらえたり、保護してもらえると主観的な確信や安心感を主体が絶えず抱いていることになる。

Bowlby の愛着理論に基づけば、愛着対象とされるのは主として養育者としての人間である。したがって、愛着対象が人間である以上、愛着対象の喪失が考慮される。愛着対象の喪失の形態として、最も重いものは、愛着対象との死別であると考えられているが、愛着対象との死別は恐怖体験になることもあれば、ならないこともある (Bonanno, Kaltman, 1999)。恐怖は、喪失が突然で、愛着対象の不在に準備できない場合に起こりやすい。つまり、非自発的で、その中でも予測不可能な場合に恐怖を感じやすいということである。また、喪失の脅威は個人によ

り異なるが、最終的にトラウマティックになりやすいのは事実である (Zisook et al., 1998)。Davis et al. (1998) は、愛着対象の喪失体験からの回復過程において、①「意味の創出」あるいは喪失体験を自分自身や世界に関する広い前提に統合する能力、②その体験に長所やポジティブな意味を見つけることの 2 点を重要視した。また、心理学においては、愛着対象の喪失とは異なるが、乳児が特定の愛着対象と離れ離れになった際、「抗議 (protest)」、「絶望 (despair)」、「脱愛着 (detachment)」の過程を経て、新たな保護対象を獲得することも指摘されている。

「母 - 子」の関係を始点とした心理学の愛着についての議論において評価できることは、愛着対象の喪失とその回復過程について議論していることである。従来の人文地理学における場所への愛着の議論に不足している点があるとすれば、場所への愛着が、人間から場所への一方向的なものとして捉えられ、場所の喪失についての言及があったとしても、その後の過程を追うことを重視していないことである。心理学の愛着理論における愛着対象の喪失からの回復過程は、人文地理学における「人間 - 場所」の関係性を捉える際、意味を持つと考えられる。また、後述するが、Tuan の場所の捉え方は、Bowlby の愛着理論に少なからず通じるところがある。

3. 「場所への愛着」の研究の変遷

(1) Tuan のトポフィリアとその発展

『空間の詩学』において、Bachelard (1957) は、幸福な空間のイメージの調査を「トポフィリア (場所への愛)」と名付けた。この「トポフィリア」という言葉が、Tuan (1974) の「トポフィリア (Topophilia)」すなわち「場所への愛着」の語源と考えられる。それは、Tuan (1961) が当初「自然への愛 (love of nature)」として、トポフィリアを発表した際、Bachelard の著作である『水と夢: 物質的想像力試論』(1942) や『空間の詩学』(1957) から多くの引用をしていたことから推測される。Tuan (1974) は、「場所への愛着 (Topophilia)」を、「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつきのこと」と定義したが、心理学における愛着理論を踏まえれば、

「場所への愛着」は単なるノスタルジックなものとして解釈されるに留まらないことが指摘できるのではないか。しかし、まずは Tuan (1974:1977) を中心に、従来の人文主義地理学における「場所への愛着」の概念の整理をすることから始める。

Tuan は空間と場所を、対立するものではなく、互いを説明するときに不可欠な概念として位置付ける。そして、抽象的な空間に経験を通して意味付けがされることで人間が場所を獲得すると考えている。Tuan の経験とは、感覚、特に視覚、感情、思考によるものであり、これらの人間の感覚が複合し、積み重ねることによってわれわれの生活している空間が秩序化されるとする。また、Tuan は、空間を身体が密着する経験の次元から把握するものとしているため、経験そのものを重要視する傾向にある。つまり人間が空間を経験している状態こそが、Tuan にとっての個人的な経験のもとに生ずる「場所」なのである。しかし、ここで指摘しておきたいのは、Tuan のいう経験とは、個人の環境の空間認識を指すように捉えることができる点である。突き詰めれば、それは個人主義に陥る可能性があり、Tuan の研究の方向のひとつは個人主義であると阿部 (2001) は指摘している。また、Tuan は、「場所への愛着 (Topophilia)」の概念について、人間が持つ感覚のひとつであり、人間の感覚で最も強いものではないが、それが私たちの心を動かすとき、場所や環境は感情に満ちた出来事を担ったり、象徴として知覚されるものであると補足している。

さらに、場所への愛着を抱くための要素のひとつとして過去の認識や、家や隣近所への所有の感覚³をあげる。トポフィリアを抱く対象として、Tuan は自分の居住地やその付近だけを想定していたのではない。しかし、人間は生きていくために自分の世界に何らかの価値を見出していかなければならない。トポフィリアはその過程の中で獲得されるものと考えれば、自分の居住地とは自己の価値形成の始点であり、中核をなすものであると考えられる。しかし、当然のように存在する場所に対しての人間の想いというものは、明確に認識できるものではない。そして Tuan (1974) は、移動することが前提とされる近

代以降の主体の捉え方に対し、あくまでも克服したのは距離であって時間ではないこと、そして、人生の時間の中で、人間は今も昔も「世界の小さな片隅にしか」深く根をはることができないとして、どこかに根付く主体を前提とする。この根付きという観点に対して早くから指摘をしていたのは、Weil である。Weil (1955) は根を持つということは、人間の魂の最も重要な欲求であると同時に、最も無視されている欲求であり、最も定義の難しい欲求のひとつであるとしている。Tuan が Weil の影響を受けていたのは事実である⁴。

Tuan は全著書を通して、フッサールやハイデガーやメルロ・ポンティといったいわゆる現象学者を基礎として議論を展開せず、むしろ発達心理学者のような立場をとっていた。それに対して、Weil の根付きについて引用をしたうえで、実存主義現象学を地理学に組み込んだ地理学者に、Relph がいる。Relph (1976) は、人間と場所との実存的な関わりの状況を、「根付くこと (rootedness)」:「根無し草 (uprootedness)」、「内側性 (insideness)」:「外側性 (outsideness)」、「場所性 (placeness)」:「没場所性 (placelessness)」という 3 組の二項対立で示している。そして、その中でも根付くことに対する欲求に関しては、「秩序や自由、義務、平等、そして安全に対する欲求と少なくとも同等の価値」を持つものとして捉え、他の精神的欲求のために必要な前提条件として位置付ける。そして、根付くことにより主体は世界を見るための安全地帯を確保し、物事の秩序の中に自分自身を位置付けることが可能となり、このことが特定の場所に深い精神的心理的な愛着を持つことであるとする。また、審美的なものに対する愛着も場所への愛着の一種としていた Tuan とは異なり、Relph は、ハイデガーの「私がある・いる」とは、「私が住まう」ことであるという人間存在の本質としての「住まう」ことを議論に加え、場所への愛着の対象を日常生活に限定していく。そして、Relph (1976) は、現代社会において、「住まいの場所」に対する愛着の喪失が広まっていることは、事実だと認識しているが、ハイデガーの議論のように、完全に「住まい」を失ったとするのは極端であると

批判する。「住まいの場所」と人間との関係性に、「完全な愛着と完全な離反の他にも多くの段階」が存在し、その関係性の表出の瞬間が、人間が敗北や困難に直面したときである可能性を指摘する。つまり、日常的に人間は「住まいの場所」との関わりを意識しないが、「住まいの場所」との関わりが人間にとって重要であることに違いなく、人間存在の基礎であり、全ての人間活動の背景となるだけではなく、個人や集団に対する存在保証とアイデンティティを与えるものであるということである。その際、Relphが重要視するのは、建造物等の景観であるが、人間が場所に対して愛着を持つとき、建造物や自然環境だけでなく、その場所に固有の人間関係があると相澤(2002)は指摘した。

(2) 安全基地獲得のための場所への愛着の存在

場所への愛着を提唱した後、Tuan(1977)は、子どもにとって第一の「場所」である親は、栄養と保護の源泉であり、確固たる安定性のある避難所であるが、成熟した大人は、子どものように他者に依存することが少ない代わりに、安全と保証を対象物や土地や理念の追求の中に見出すことを指摘する。これは、愛着の対象は養育者から物理的な対象物へと変換できるという考え方をういた心理学者のGiuliani(1991)と共通するところがある。Giuliani(1991)は、家を含む対象物への愛着を「対象が近くに存在する事もしくは近づきやすい事による心理的良好状態と、対象が無い事、遠い事、近づきにくい事による苦痛状態」とし、日常は意識しないが初めて気付く絆であるとして人間と場所との関係を述べた。これは、Bowlby(1969; 1973; 1980)ほかの対人面での愛着理論を基に発展したと考えられる。

また、『トポフィリア: 環境と人間』の「ペーパーバック版への序」において、Tuan(1990)は、あらゆる地域の人々にとって環境とは、使用されるべき資源の基盤や、適合すべき自然の力だけではなく、保証と喜びのみなもとであり、深い愛着と愛情の対象でもあるとして、自らの地理学におけるキーワードは、他の多くの地理学者が用いる「生存」や「適応」だけに留まらないとした。つまり、場所を安全

基地や、自己承認のためのものとして捉えるために、場所への愛着という概念の存在があることが指摘できる。

(3) 愛着対象としての場所の喪失に対する人間の反応

では、愛着対象としての場所の喪失について、どのような指摘がなされてきているのか。Relph(1976)は著書『場所の現象学: 没場所性を越えて』の中で、場所の喪失についての事例をいくつか紹介している。例えば、Fried(1963)によるボストンのウエスト・エンド地区から市内の他の地域に転居させられた人々のグループの痛々しい喪失感や絶え間ない渴望、無力感、失った場所を理想化する傾向等の感情的反応を持つことの指摘や、Lifton(1967)やCox(1968)が扱った戦争によって破壊された場所が人間に与える衝撃等である。

愛着対象としての場所を喪失した際、人間はショックを受けると考えられる。しかし、人間は多くの場合、愛着のある場所を失った先も生き続けているのであり、その心の変化や愛着を抱いていた場所との付き合い方の変遷を追うことこそ、重要だと筆者は考える。人間と人間の愛着関係について言及する心理学の愛着理論が、愛着対象の死別等の受容過程を検討に入れることに対して、人間と場所の愛着関係について言及する人文地理学は、これまで場所の喪失の受容過程を検討することを重視してこなかった。Tuan(1974)は、トポフィリアの形成には直接関係のないものとして場所の喪失のひとつである自然災害についての検討を避けた。また、Tuan(1986)は、人間によって築かれた世界である場所が自然災害によって奪われることが人間にとって辛い経験になることを指摘するに留まる。確かに、場所への愛着の形成過程に直接的な影響を与えることはないかもしれないが、主体によって抱かれた場所への愛着が消失するのか、存在し続けるのかというような人間と場所との関係性の強さは、そうした場所の喪失の受容過程を追うことで検討することができるのではないかと。また、愛着を抱いていた場所を喪失するという事実は実際に起こり得るのであり、それを避けては通れず、予測不可能な自然災害は誰の身にも

起こる可能性がある。とりわけ、日本は自然災害の多い国である。以上のような理由から、場所への愛着を考える際、その対象の喪失の可能性について言及することは意義があると考えられる。

また、場所というものが個人的なものであり、かつ社会的なものであるということ踏まえれば、個人の経験について語る際には、必然的にある場所について語ると考えられるし、ある場所について語る際には、必然的に個人の経験が語られることになる。社会についても同様のことが言える。ここには、切り離すことのできない人間と場所とのつながりが存在する。そのことを踏まえ、場所への愛着の議論は、個人の実存、その一形態としての日常生活を保証するところから出発し、その背景として社会の動きが捉えられるべきと考える。

3章 場所の喪失と場所への愛着の関係性

1. 複線径路・等至性モデル (TEM) について

本稿で扱う複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model; 以下 TEM) は、「複線径路」と「等至性」という2つの概念を特徴とする文化心理学の比較的新しい質的研究法である。サトウほか (2009) によれば、人間を開放システムとして捉えるシステム論 (von Bertalanffy, 1968) に依拠する点、時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する点の2点にも特徴がある。等至性 (Equifinality) とは、それらを取り巻く外界・環境との交換関係を抜きにしては存在し得ない開放システムが、異なる径路をたどりながらも類似 (similar) の結果にたどりつくことであり、それを径路図 (以下 TEM 図) を用いて提示するのが TEM である。

本稿で TEM 図を作成するにあたり使用する点についての用語説明をする。まず、等至性を実現する等至点 (Equifinality Point=EFP) である。複線径路は、発達径路の多重性 (Multi-linearity) を示すための概念であるが、これは等至点が想定されることにより定まる。この場合の複線径路とは、ひとつの等至点までの径路の多様さを表し、研究上の焦点となる事象がひとつに絞られるべきということを意味

しない。次に、必須通過点 (Obligatory Passage Point=OPP) である。ここでの「必須」は、「全員が必ず」という意味ではなく、「多くの人が」という意味である。「多くの人が」経験する可能性のある事象を設定することで、多様な個人の経験をまとめる契機を見つけやすくする役割を担う。以上2つの点と、非可逆的な時間軸を用いて、複数の個人の経験、あるいは個人の中に可能性として存在する複数の体験の流れを比較分析する。また、径路が発生、分岐するポイントは分岐点 (Bifurcation Point=BFP) として概念化されているが、本稿において分岐点を特別に設けることはしなかった。それは、調査対象者の語りの分析を通して見出すことができた等至点の後の径路もたどったからであり、等至点は分岐点でもあるという二重性を持つものと考えたからである。

TEM による質的研究は、主体の経験のプロセスを良い、悪いという単純な型にはめることよりも、調査対象者が経験する出来事を丁寧に記述することに重きを置く。また、変化だけに注目するのではなく、変化しないという過程も重視する。それは、変化がないことが、必ずしも沈滞という否定的状態を意味しないとするからである。

さらに、サトウ (2012) は、対象者のサンプリングにあたり、研究者が関心をもった経験を等至点として設定し、その等至点となる事象を経験した人を研究対象としている。しかし、本稿の分析においては、「阪神・淡路大震災で被災した」、「阪神・淡路大震災時に神戸市長田区と関わりを持っていた」という共通点に基づきサンプリングをした。そして、人間と場所との関わり方の変化を読み取ることを第一の目標として、ヒアリング内容を KJ 法 (川喜田, 1970) によってカテゴライズした後、時系列に並べ、等至点を見出すという方法をとった。

また、森 (2009) によれば TEM は、等至点に至る過程を対象とする回顧型と等至点から発散していく過程を対象とする前向型の大きく2つの型に分類することができる。前者は、採取されたデータが終着点への到達を必然とみなす物語として構成される恐れがあるため、調査対象者に特定の物語を語らせる可能性を孕む。それに対して、後者は調査対象者

と併走するようにして調査を進めるため特定の物語を語らせることを避けることができる。しかし、TEM という方法論を人文地理学に用いる場合、前向型よりも、回顧型として TEM を使用することが多くなると考えられる。それは、既に起こった、または起こっている事象に対して研究者が評価をしようとするからである。語られる過去というものは、ある地点から語る主体により再構成されたものである。しかし同時に、再構成された過去は、主体の現在に繋がるものとして位置付けられる。したがって、阪神・淡路大震災による「場所の喪失」を現在という地点から主体が語る時、「場所の喪失」という事実の受容の過程は、現在の主体の生き方に繋がるものだと考えられる。「場所の喪失」をキーワードに、人間と場所との関係性の変化を検討するにあたって、TEM を用い、時間軸を設定してその経験を追うことで、主体の中でどのようにその経験が位置付けられ、また、その過程において場所への愛着が主体にどのような影響を与えたり、また場所への愛着の性質が変化したりしたかということを明らかにできると考えた。また、場所の喪失の受容の変化の多様性を提示できるという点でも TEM は本稿に適していると考えた。

2. 場所の喪失の受容過程の時系列的記述

阪神・淡路大震災の際、神戸市長田区と何らかの関わりを持っていた調査対象者の語りを用いて、場所の喪失の受容過程を追う。調査対象者は、A～D の 4 人である (第 1 表)。いずれも、震災によって当時住んでいた自宅が完全になくなったり、身内が死ぬという経験はしていないが、調査対象者として選出したのは、本稿で着目したいことがそういった経験をしていなくとも場所に対する喪失感を少なからず覚えたということだからである。

調査期間は 2016 年 10 月上旬～12 月上旬であり、調査対象者の希望する場所で実施した。ヒアリング回数は 1 名につき 1 回であり、ヒアリング時間は調査対象者により異なるが、概ね 2 時間程度であった。ヒアリング内容は、震災当時の様子、震災後の生活や生活再建過程、震災を経て神戸市長田区に対する

想いの変化、現在の神戸市長田区との関わり方、震災前の思い出、現在の生活等であり、比較的自由に話してもらった。

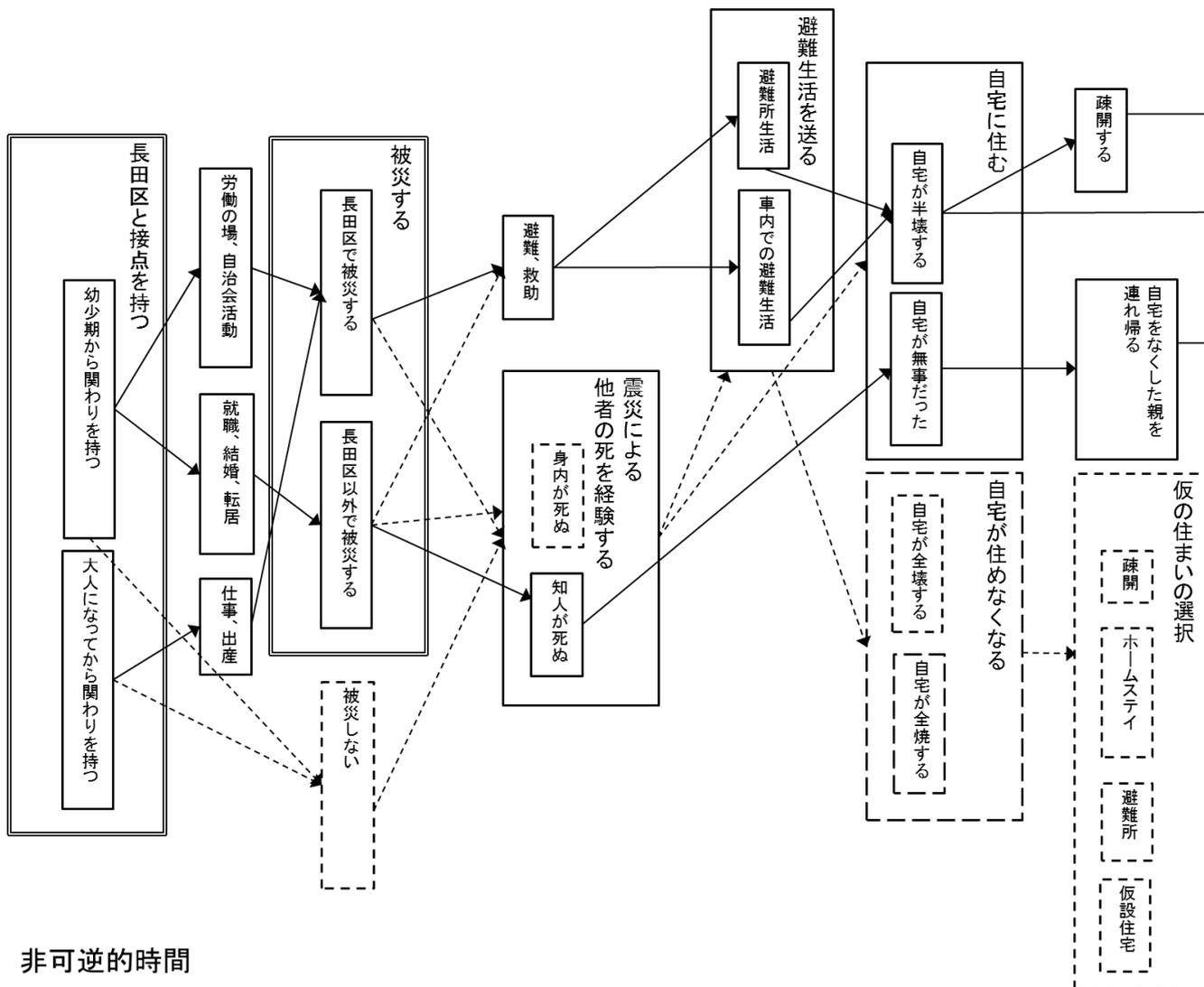
また、A～D の 4 人の場所の喪失の受容過程をまとめた TEM 図が第 1 図である。第 1 図において、調査対象者の語りから直接得られた径路は実線で、理論的に存在すると考えられる径路については破線で示した。

第 1 表: 調査対象者一覧

	A	B	C	D
性別	女性	女性	男性	男性
年齢	59	57	55	55
被災当時の年齢	37	35	33	33
出身	神戸市 灘区	京都府 京都市	神戸市 長田区	神戸市 長田区
被災場所	神戸市 長田区	神戸市 長田区	神戸市 長田区	神戸市 垂水区
自宅の被災状況	半壊 認定	半壊 認定	一部 損害	一部 損害
実家の被災状況	全壊	-	全壊	全焼
現在の居住地	神戸市 長田区	神戸市 西区	神戸市 長田区	神戸市 西区

また、A～D の語りを時間経過に沿って整理するにあたり、①「長田区と接点を持つ」から「被災する」まで、②「被災する」から「生活再建の目処をたてる」まで、③「生活再建の目処をたてる」からその後の「長田区との関わり方」、の 3 つの時期に区分した。その結果が第 2 表～第 4 表である。さらに、必須通過点として「長田区と接点を持つ」、「被災する」、「長田区との関わり方」、等至点として「生活再建の目処をつける」が見出された。以下、第 1 図を補足する形で考察を進める。

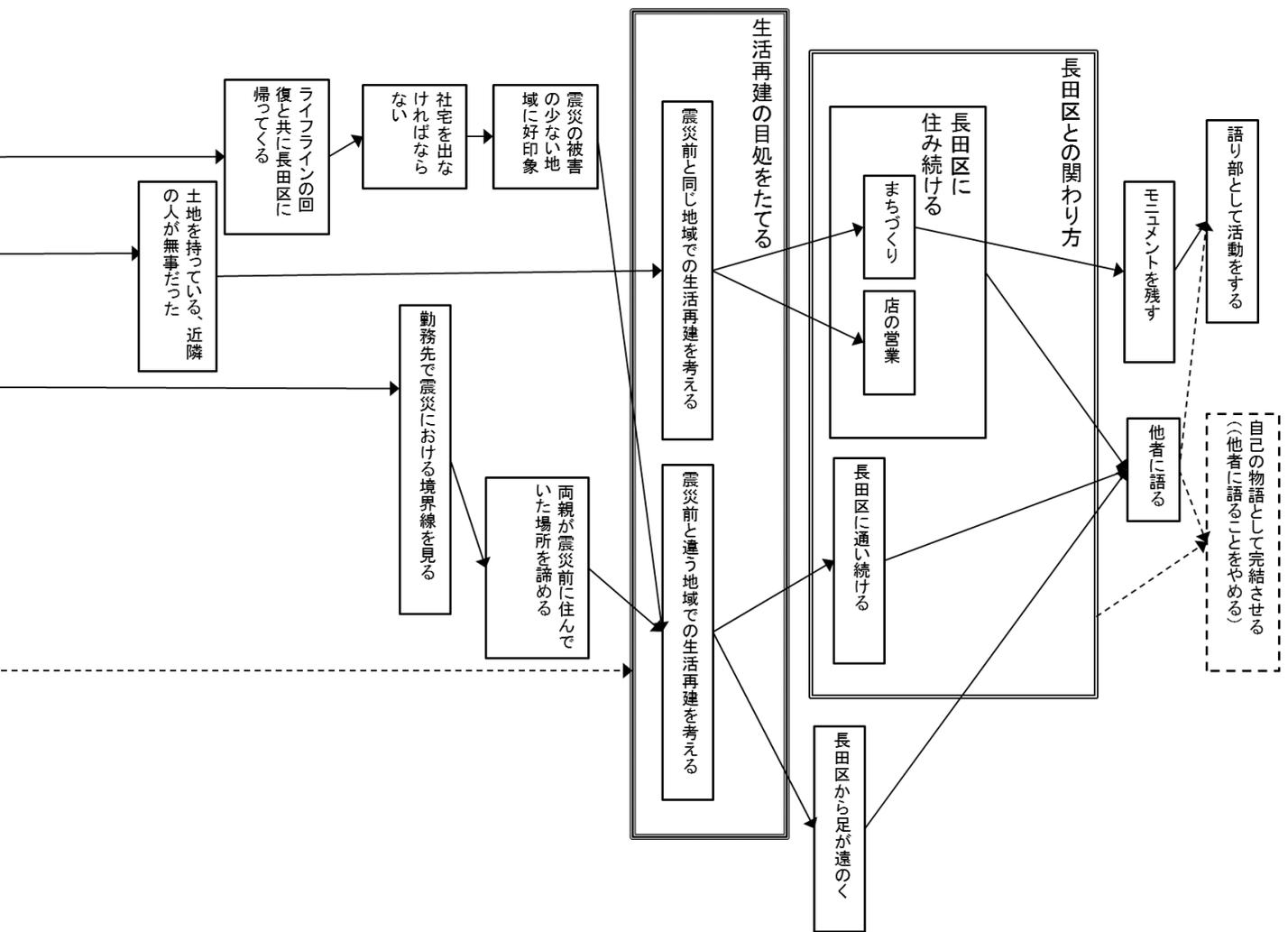
(1) ①「長田区と接点を持つ」から「被災する」まで
神戸市長田区と接点を持つきっかけや接点の持ち方は、調査対象者により多様である。しかし、調査対象者が震災当日について語る時、その内容には一定の類似性が見出せた。そこでは、場所に対する



非可逆的時間

- 等至点 (EFP)
- 必須通過点 (OPP)
- その他の選択や行為
- 語りからは得られなかったが、制度的・論理的に多くの人が通過すると考えられる選択や行為
- > 語りから得られた径路
- - - -> 語りからは得られなかったが、理論的に存在すると考えられる径路

第1図 調査対象者の神戸市長田区との関わり方



第2表 時間経過でまとめた調査対象者の語り (①「長田区と接点を持つ」から「被災する」まで)

		A	B	C	D
①	長田区と接点を持つきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・父親が長田区で飲食店を開く ・当時住んでいた西明石よりもAとAの夫の勤務先へのアクセスがよかったため、両親の家兼店の側に転居する 	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚を機に夫の勤務先の社宅に転居する 	<ul style="list-style-type: none"> ・生まれ育つ ・10代の頃より親の代わりに自治会に参加する ・勤務先がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖母の家があったためよく遊びに行く ・両親が祖母と同居するようになり、Dの思い出のものが全て昔の祖母の家に移動する
	被災当時の様子、心境	<ul style="list-style-type: none"> ・実家で被災、実家が全壊する ・実家の向かいの区画まで燃える 	<ul style="list-style-type: none"> ・「怖かった」 ・助かったが、どうしたらよいか分からない気持ちになる ・平和の象徴であった神戸でよもやこんな目に合うなんてという気持ちになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・実家で被災する ・救助活動をする ・あたり一面の焼け野原となる 	<ul style="list-style-type: none"> ・垂水区の自宅で被災する ・長田区の両親に電話をするが繋がらず、父親が公衆電話から電話をかけてきて実家が火災にあったことを知り、迎えに行く

第3表 時間経過でまとめた調査対象者の語り (②「被災する」から「生活再建の目処をたてる」まで)

		A	B	C	D
②	被災後の生活、心境	<ul style="list-style-type: none"> ・車内で避難生活を送る ・半壊した自宅での生活を送る ・子どもの環境を整えることに必死になる ・幼少期に育った灘区の被害をメディアを通して知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所生活を送る ・子どものことを考え京都市の実家に疎開する ・メディアを通して被害の全貌を知り、悲しくて涙する ・家が潰れたり、誰かが死んだという体験がなかったため、それほど悲壮感がない ・ライフラインの回復と共に神戸に帰り、商店街や繁華街の被害実態を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・車内で避難生活を送る ・自宅が一部損害で済んだため戻る ・まちづくりのためのヒアリングや住民集会等に奔走する ・新しいまちがどうやってできるかに対する好奇心を抱く ・地域の夜警をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・両親から実家がどのようにして燃えたか等を聞く ・なじみの店の店主など、自分の幼少期を知る知人の多くが亡くなったことを知る ・思い出を探しに焼け跡に通うが手にしたとたん崩れていく炭化した思い出の品を見て結局燃えてなくなったらすべて終わりだと諦める ・勤務先で震災の被害の偏りを実感する
	生活再建の目処をたてる	<ul style="list-style-type: none"> ・実家を父親が再建し、店を再開する ・店を手伝う 	<ul style="list-style-type: none"> ・社宅から引っ越さなければならなかったため、被害が大きかった東方面を避け、西方面への引越しを考える ・仮設住宅はあるが、区画整理のされた綺麗な西区を見てこっちは楽そう、綺麗なままでいいなと思うと同時に、今後の生活への夢が溢れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場も実家も長田区のため、長田区の復興に尽力する ・木造家屋の密集地域だった自分の育った地域をよりよくしたいという気持ちを抱く ・地域のことばかりに力を注いだため息子が反発する 	<ul style="list-style-type: none"> ・垂水区の自宅に両親を連れ帰る ・両親が長田区で再建することを諦める ・西区への引越しを検討する

第4表 時間経過でまとめた調査対象者の語り (③「生活再建の目処をたてる」からその後の「長田区との関わり方」)

		A	B	C	D
③	その後の生活、心境	<ul style="list-style-type: none"> ・長田区に根をはっているという感覚がある ・気分的に怖くて同窓会の案内が来ても灘区には行けずじまいでいる ・2年前に灘区を訪れるが、変貌ぶりにショックを受ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・西区で子育てをし、生活を続ける ・震災経験を通して、誰がどこで被災してどのような過去を持っているかわからないと思うようになり、会話の際気をつけるようになる ・第2子が生まれたこともあり、復興の過程をよく知らないまま、復興した姿を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のためにまちづくり活動を続ける ・息子が自分の活動を理解してくれるようになる ・モニュメントを残す 	<ul style="list-style-type: none"> ・語り継ぐことに意味を見出す ・母校の同窓会の資料整理の仕事始める
	長田区に対する想い、関わり方	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の場となる ・まちの変化に対して落ち込んだりすることはなく、便利になったなと思う ・たまに震災の前はどうだったかを考える程度で、長田区で場所に対して喪失感を抱かない ・人生で一番長く居住した地域になるが、灘区ほどの愛着を抱かない 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの遠足や受験などで長田区を訪れる機会があると嬉しく思う ・商店街が懐かしい、店が変わっていると残念に思う ・特殊な思い出のある場所として愛着を抱く 	<ul style="list-style-type: none"> ・昔の地域の様子しか知らない人からまち綺麗になったねと言われると嬉しく思う ・まちが綺麗になりすぎるのも変だとごちゃごちゃした所や、空き地の存在を肯定する ・まちづくり活動を通して地域の問題解決につとめる ・まちづくりに関する講演をしたり、学生を教えたりする ・地域がCを必要とする 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の名前をつけてくれた長田神社には欠かさず初詣に行く ・長田区のことを忘れないとは思わなかったり、建物が変わったりして惹かれなくなり足が遠のく ・長田区に行っても変わってしまった風景を前にして懐かしいとは思わなくなる

想いではなく、当時の自分の行動や非常事態に対する心境が中心となる。例外は、被災直後より生活拠点確保できていたDであった。

先述したように、神戸市長田区と接点を持つきっかけは調査対象者により多様であるが、AとBは大人になってから神戸市長田区と接点を持ったのに対し、CとDは幼少期より神戸市長田区と接点を持っていたという大きな違いがあることをまず指摘しておく。Aは26歳のとき、父親が神戸市長田区で飲食店を出すという選択をした。そのことに影響され、神戸市長田区に転居している。その際の最も強い動機は、AとAの夫の通勤に都合が良かったからというものである。Bにとって神戸市長田区は神戸市の中のひとつの区に過ぎず、京都市に住んでい

たときに認識していた「神戸市」とは神戸市中央区の繁華街であった。しかし、現在の夫が勤務していた会社の社宅が神戸市長田区にあり、結婚を機に神戸市長田区に居住することになった。その後、Bは神戸市長田区に対して、それまで30年あまり住んでいた京都市よりも強い愛着を抱いている。それに対して、CとDは幼少期より神戸市長田区と密接な関わりを持っており、神戸市長田区での経験を積み重ねている。その結果として、両者とも神戸市長田区において、他者との関わりを築くことができていた。

D以外は、神戸市長田区で被災したが、被災当時の体験の語りからは、潰れた家屋、火事の様子や焼け野原となったまちの姿、瓦礫の撤去、被害の様子、

埋もれた人の救助、避難までに何をしていたか、その当時の怖さやどうしたらよいか分からない不安の気持ちが抽出できた。しかし、そこにあるのは、あくまでも震災でどのような被害を受けたか、どのような行動をしたか、どのような気持ちになったかというものであり、自分の生活の場所が喪失したことに対する嘆きではなかった。また、Cは元々木造家屋の密集地であった自分の地域に問題意識を持っており、これからどのように変わっていくのかという好奇心を抱いていた。それは、震災以前も自治会活動等を通してよりよいまちにしようと動いていたことが影響していたと考えられる。

それに対して、神戸市長田区の実家を離れ、神戸市垂水区に居住し、そこで被災したDは、被災当時の語りの中で、自らの思い出が詰まった神戸市長田区という場所について言及している。そこで得られた語りは、諦めとも取れる。Dが生まれ育ったのは、全焼した神戸市長田区の家ではないが、両親が祖母の家へ引越す際に、Dの卒業アルバムや、インターカレッジに出場したときに使っていたスポーツ用品等と一緒に神戸市長田区の家へと移動していた。したがって、Dの自宅は壁にひびが入る程度の損害で済んだにも関わらず、Dの大切なものは全て焼失してしまったのである。

AやBが場所の喪失について語るのはもう少し後である。もちろん、先行研究にあるように、変わり果てた風景や景観に対するショックを抱くことは考えられる。しかし、場所を喪失したという事実についてじっくりと考える余裕はその後にはない。それは、場所への喪失感を意識するよりも、生活再建が優先されていたことを示す。つまり、場所の喪失に対して想いを馳せるのは、生活再建の目処がたち、少し気持ちに余裕ができたときであると推測ができる。それと同時に、震災から20年以上後に震災当日の被災状況について語る際、どのように被災当時の状況に対処したかということに主眼点が置かれる傾向にあるということも指摘できる。また、後述するが、AとBが当時幼い子どもを持つ女性だったということは場所に対する喪失感を抱くに至るまでに時間を要した要因のひとつとして考えるに

値するのではない。被災後、次なる目標となるのは、生活再建の目処をたてることであった。被災後の非日常的な避難生活から日常的生活を取り戻すための生活再建の目処がたつまでの調査対象者と場所との関わり方は、どのような過程をたどるのか。それが現れてくるのが時期②である。

② ②「被災する」から「生活再建の目処をたてる」まで

AとCは震災当時の居住地での生活再建を選択した。両者とも自宅は半壊以下の被害で済んでいたが、両親の経営する店や勤務先は大きな被害を受けていた。

Aの父親は、経営していた店の周りで誰かが亡くなったりしたということがなかったこともあり、翌年の4月に同じ場所で店を再開した。その頃Aは子育てに追われており、なぜ父親が同じ場所での店の再開を選択したか等を気にかけていなかったという。Aは、仕事を辞めた35歳くらいから店を手伝っていたが、今から12～13年前からそれ以前はAの母親がやっていた店のおかず作りの仕事もするようになる。このように、Aの生活再建は、本人も自覚しているように、自分の意志で選択したというよりは、周囲の決定に流されるようにして進んでいった。それは、Aが子育てをしていたということも大いに関係していたと考えられる。神戸市長田区での住宅再建を選択したために、子どもの遊び場等の心配をしなければならなかったのである。例えば、屋外は解体現場からの埃がまっていたため、子どもの公園デビューを断念し、大学時代の友人のすすめで音楽教室に通わせる等、Aの震災後の生活は子ども中心に進んでいったのである。

これはBにも共通することである。Bは、子どものことを考慮し、半壊認定を受けた自宅ではなく、京都市の実家に一時的に子どもと疎開することを選択した。そこでメディアを通して被害の全貌を知ることになるが、気になったのは独身時代に遊びに行っていた神戸市中央区の被害であった。悲しくなって泣いたこともあったと語るが、5年程度しか神戸市に住んでいなかったこともあり、神戸市東灘区等の被災状況を見ても被災前のイメージがわかな

かった。また、知人が亡くなったり、家が潰れたりといった体験をしなかったため、そういった体験をした人と比較すれば、そこまで大きな悲壮感を抱かなかったと振り返る。その後、ライフラインの回復の知らせを夫からうけ神戸市長田区の自宅に戻り、自宅付近の被害状況を目の当たりにする。しかし、社宅の退去期限が迫っていたこともあって、被害の少なかった西方面へと意識が向き、38歳で神戸市西区の新居へと引っ越し、その後は子育てに追われ神戸市全体の復興過程を意識する余裕はなかった。

現在は父親も子育てに協力するというのが一般的になりつつあるが、20年以上前では、母親が子育てをするというのが一般的だという認識が強かった。したがって、子育て世代の女性は男性以上に喪失した場所に対して考える余裕を持つのに時間がかかった可能性がある。これは、場所と主体との関係性に直接影響を与えるものではないが、社会的な制約が主体に影響した結果として、主体が場所を意識することを遅らせたジェンダー的要因であると考えられる。この点について深く検討することは避けるが、今後こうした場所の喪失過程を検討するにあたり、ジェンダーや子どもの有無は検討の際の観点として重要であると考えられる。

Dは、後に神戸市垂水区から神戸市西区へ住み替えをしたが、その際、震災により自宅をなくした両親も神戸市西区へ移住している。震災直後は自宅のあった焼け跡に通うも、思い出のものは炭化し、Dの手の中で崩れ落ちた。D自身は震災以前から神戸市長田区以外で生活をしてきたこともあり、勤務先で被害の大きかった地域の人と被害が小さかった地域の人との服装の差等を通して、何事も境界というものがあるのだと震災を客観的に捉え始めた。またDは、神戸市垂水区のDの自宅に避難させた両親によりよい生活環境を提供しようと赤穂市や姫路市のビジネスホテルでの生活を提案していた。しかし、両親は自宅の焼け跡に残した貼り紙を見て誰かが自分たちを訪ねてくるかもしれないとそれを拒んだ。そのような両親の姿を見て、Dは地元にも拘る気持ちや名残惜しさを理解し始める。

対して、Cの生活再建までの過程はめまぐるしい。

場所に対する喪失感を抱く間もなく、よりよいまちにしようと奔走する。震災以降のまちづくりの活動の成果が次第に目に見えるようになるにつれて、それに対する満足感や、外部からの評価にCは喜びを覚えている。それは、まちづくりの過程はCの生きた軌跡であると考えれば納得がいく。震災をきっかけとして、Cの人生が大きく変わったのは言うまでもなく、C自身が、震災がなかったら自分はただの変なおじさんだったと語った。

避難所生活や疎開等、震災後の生活は震災前の生活とは全く異なる非日常体験であった。そこで語られるのは、どのようにその非日常に対処していったかということである。時期②で語られたことも、時期①と大差はない。その非日常の生活から、日常の生活へと戻るのは、生活再建の目処がたってからである。どこで生活をするのかということが明確になり、少しずつ震災前の生活を取り戻していく中でやっと喪失した場所に対する想いが語られてくるのである。また、生活再建の場所を震災前後で変えるかどうかは、この生活再建の目処をたてる段階で選択される。この選択によって、それ以降の神戸市長田区との関わり方大きく変わっていくことになる。

③ ③「生活再建の目処をたてる」からその後の「長田区との関わり方」

「生活再建の目処をたてる」ことができてからは、どの調査対象者の経験も日常生活を取り戻すための最低限の手続きを終えているため、愛着のあった場所に対する想いがより多く語られた。したがって、「生活再建の目処をたてる」ことを終えて、調査対象者は日常生活を取り戻すための手続きを完了したと言えるのではないかと。そして、そこから場所に対する想いを認識することや日常生活を送ることを通して場所への新たな意味付けが可能になり、場所の喪失という事実を徐々に受容していくのである。

神戸市長田区での生活再建を選択したAとCについて言及する。Aにとって、現在に至るまで神戸市長田区は生活の場となっている。そしてA本人も神戸市長田区に根付いているという自覚がある。し

かし、神戸市長田区に対して明確な愛着を抱いているという自覚はない。対して、Cはまちづくりの活動を通じたさまざまな人との出会いを楽しむと共に、まちの維持の難しさや、まちづくりの世代交代等、この先のことを考えている。また、2011年に東日本大震災があったこともあり、Cは他所でまちづくりに関する講演活動を行ったり、震災遺構やモニメントを通して震災の語り継ぎをしていると語った。

BとDはその後、神戸市西区での生活を続けている。Bは今でも神戸市長田区に対して愛着を抱いていると自覚している。なくなっほしくない場所として神戸市長田区の板宿商店街を明確にあげるが、愛着を抱く対象は震災前後に生活していた範囲であり、具体的な場所としては語らなかった。また、Bは、神戸市西区に転居したあとも、神戸市長田区に行く機会があれば、それを喜んでいたという。例えば、子どもの遠足や受験の説明会といったものであるが、そのような機会には、昔生活していた場所を訪れて当時の自分の状況を回顧している。最近ほ、板宿商店街の店舗が変わり、好きだった魚屋のお兄さんの姿が見えなくなっ残念だと語る。Bは神戸市長田区に対し、少しずつ当時の面影がなくなっきてきているのが寂しいと語るが、板宿商店街という建造物そのものや昔住んでいた社宅までの坂が、Bが転居してからも大きく変わっおらず、現在も視覚的に捉えられるということが、神戸市長田区から転居しても訪問し続ける動機のひとつとなっていることが指摘できる。

Dは、自分の名前をつけてくれた長田神社への初詣は毎年欠かさないと語る。また、以前は懐かしい気持ちもあり、Dは自分の子どもと焼失した家があった辺りを訪れていた。しかし、区画整理や建て替えによる風景の変化、住民の入れ替わりによってDの過去を知る人がいなくなっこと等が重なり、次第に場所に惹かれなくなっきてきている。

AとCは今でも神戸市長田区で生活している。すなわち、神戸市長田区のあゆみは、両者の生活の軌跡でもある。まちが綺麗になったり、便利になったりすることは、両者の生活を悪くはしていない。愛

着対象としての場所が安全基地や保証の機能を担っっているとすれば、震災後に抱かれた場所への愛着は明確には自覚されていなくかもしれない。また、Cのように生まれてからずっと同じ場所に居住している場合、場所への愛着は自覚されづらくことも指摘できる。

それに対して、一度神戸市長田区から離れてしまっBとDにとって、神戸市長田区という場所は過去の経験が蓄積した場所である。したがっ、両者が再び神戸市長田区を訪れる動機として、当時を懐かしむための愛着対象の存在が必要なのである。明確なのは、当時と変わらない建造物や景観や風景、そして、そこで生活する他者の姿であろう。もちろん、その他者と調査対象者との関係が密接であっほうはその対象が喪失した際に疎遠になりやすいと考えられるが、Bが個人的に親しみを抱いていた「魚屋のお兄さん」の存在があるように、その場所を構成する視覚的要素としての他者の姿もまた重要であると言えよう。

さらに、BとDは、他者に対して語るということを通して、失われた場所に対する個人的な思い出から、喪失した場所を再構築しているという点を指摘しておく。特にDは、神戸市長田区から足が遠のいてから、他者に語り継ぐことに意義を見出している。こういった他者への語り継ぎは、震災以降も神戸市長田区に住み続けているAやCよりも強くみられた。対して、Cが行っていると答えた講演活動等は、個人的な語りの継承というよりは、教訓めいたものであり、「阪神・淡路大震災からの復興」という物語の枠に依拠したものであっ。これが悪いというわけではないが、語り部等の活動をしていく中で、話をする側の人間が話を聞いてくる側の人間が求める物語にあわせて語る内容を取捨選択していった結果、類似した物語を語るに至っている可能性がある。

喪失した場所に対する想いは、非日常的な生活の中では考慮されづらく。しかし、日常生活が保証された後、喪失した場所に対して想いを馳せる余裕が主体に生まれてくる。しかし、震災前後で生活拠点を変更したか否かで喪失した場所への想いの強さ

は異なる。生活拠点を変更しなければ、主体はそこで新たな経験としての日常生活を積み重ねていくのに対して、生活拠点を変更していれば、記憶の一部とされるのである。

3. 調査対象者 A の灘区に対する関わり方

A の神戸市灘区に対する想いの変化を別途記述する (第 2 図)。本稿の趣旨に沿えば、神戸市長田区での被害の受容過程を記述するに留めるべきである。しかし、A の神戸市灘区への愛着と、その受容過程は見逃すことができない。なぜなら、A は長らく愛着のある場所の変化を目の当たりにすることを恐れており、実際に愛着のある場所を訪れたのは今から 2 年前のことだったからである。つまり、A は場所の喪失を受容するのに 20 年近く要している。

A は今から 40 年ほど前になる大学 1 年生の夏休みに、区画整理のためにそれまで住んでいた神戸市灘区の自宅から明石市へ転居している。その際の気持ちについて A は、神戸市灘区から離れるのが寂しかったというより、大学への通学時間が増えるのがきついなと思ったと語っている。転居の際には、喪失感を抱いていなかったということである。しかし、阪神・淡路大震災以降は、強い喪失感を抱く。

A が場所の喪失を受容するのに時間がかかった原因のひとつとして、震災当時の神戸市灘区の被災状況を目の当たりにしていないことがあげられる。

「震災での被害」という震災後の神戸市灘区の変化の始点を知らないということは、その結果としての変化が震災以前の区画整理等で変わったのか、震災で変わったのか、震災後に震災とは関係なく変わったのかがわからない。また、震災以前に区画整理のために神戸市灘区からの転居を強いられている A はそれ以来、神戸市灘区と疎遠になっており、幼少期から大学生までの記憶のまま神戸市灘区のイメージが止まっている。場所の喪失を受容するにあたり、「場所が喪失した」という事実を知らないままでいることは、それだけ受容を遅くし、ショックを大きくする可能性がある。A が 2 年前に神戸市灘区を訪れたのは、神戸市灘区にある横尾忠則現代美術館へ行くついでだったそうだが、それ以前にも、幼少

期の思い出がある場所の近くへ行くことは幾度となくあった。A の中で、もう大丈夫だろうという気持ちがあったのかもしれないが、受けたショックは非常に大きかったようである。

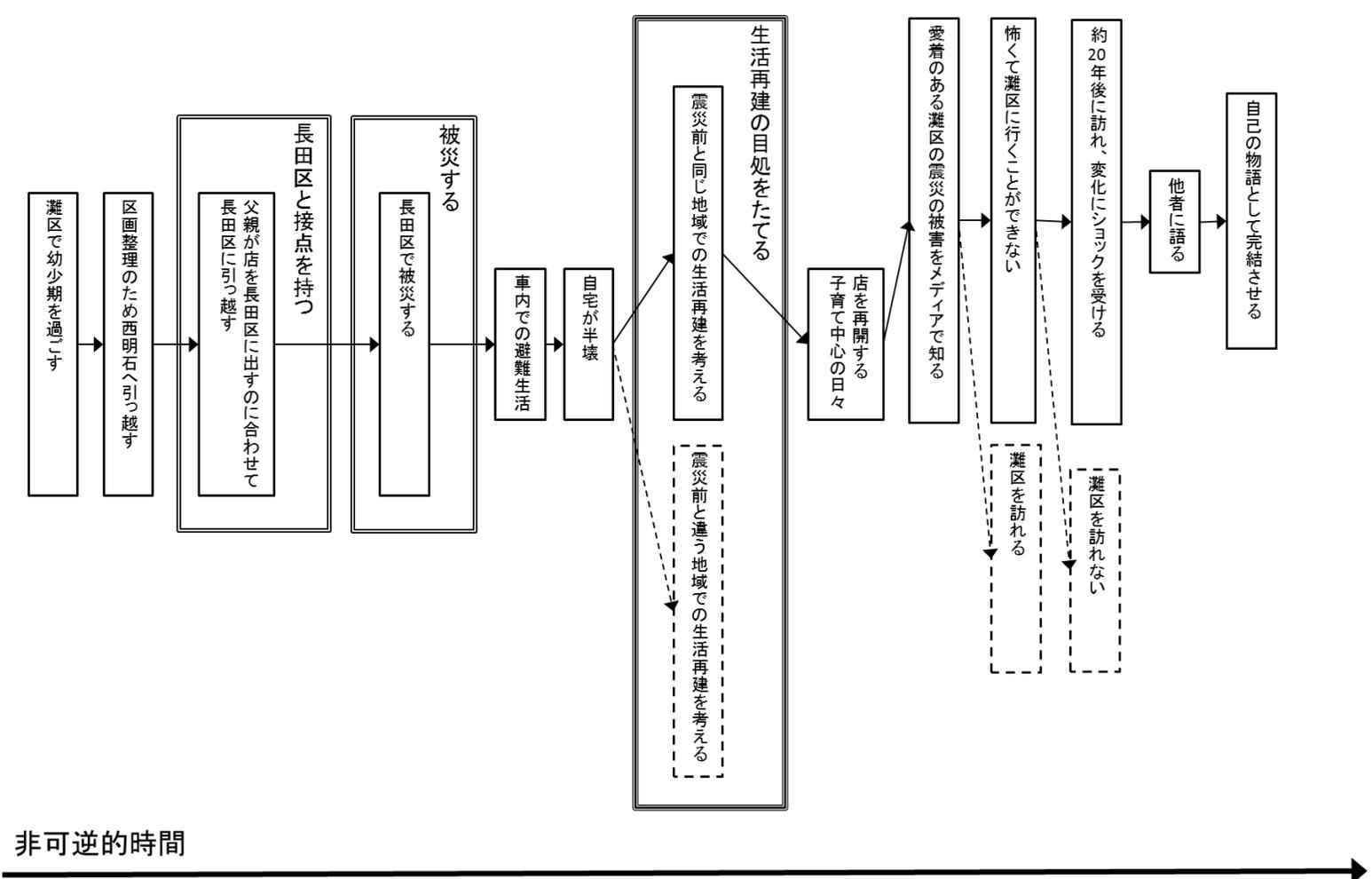
また、A は自分の子どもに昔の様子を歩きながら聞かせたとも語るが、理解を得たり、興味を持ってもらえなかった。さらに、母親と自分の視点は違ったこと、そして現在 A の母親は認知症であること、神戸市灘区の友達と疎遠になっていること等が重なり、昔の神戸市灘区について語り合う他者がいない。A は、筆者のように積極的に興味を抱き聞いてこない限り、自分の中の過去として神戸市灘区での思い出やイメージ (A の言葉では風景) を口に出さないと語っていた。A は喪失した愛着のある場所を自分の中で美化し、そこでの思い出を肯定しようとしているのである。

4 章 結論

1. 場所の喪失の受容過程

本稿では、調査対象者の語りをもとに場所の喪失経験の受容過程の TEM 図を作成し、「生活再建の目処をたてる」という等至点と共に、その後に調査対象者の経験が大きく分岐するということを見出すことができた。つまり、場所の喪失の受容過程において、キーワードとなるのは、「生活再建の目処がたつ」ことである。生活再建の目処がたつまでは、非日常を生きるためにどうしたかということが語りの中心であり、従来の地理学者の多くがキーワードとしていた「適応」や「生存」について語られる。それに対し、生活再建の目処がたち、日常生活を取り戻した後は、喪失した場所への想いが語られ始める。場所への愛着につながる主体の場所に対する想いは、自然災害等の非常時に最優先される感情ではないが、日常生活を取り戻し、主体の心に余裕が生まれると認識される感情なのである。

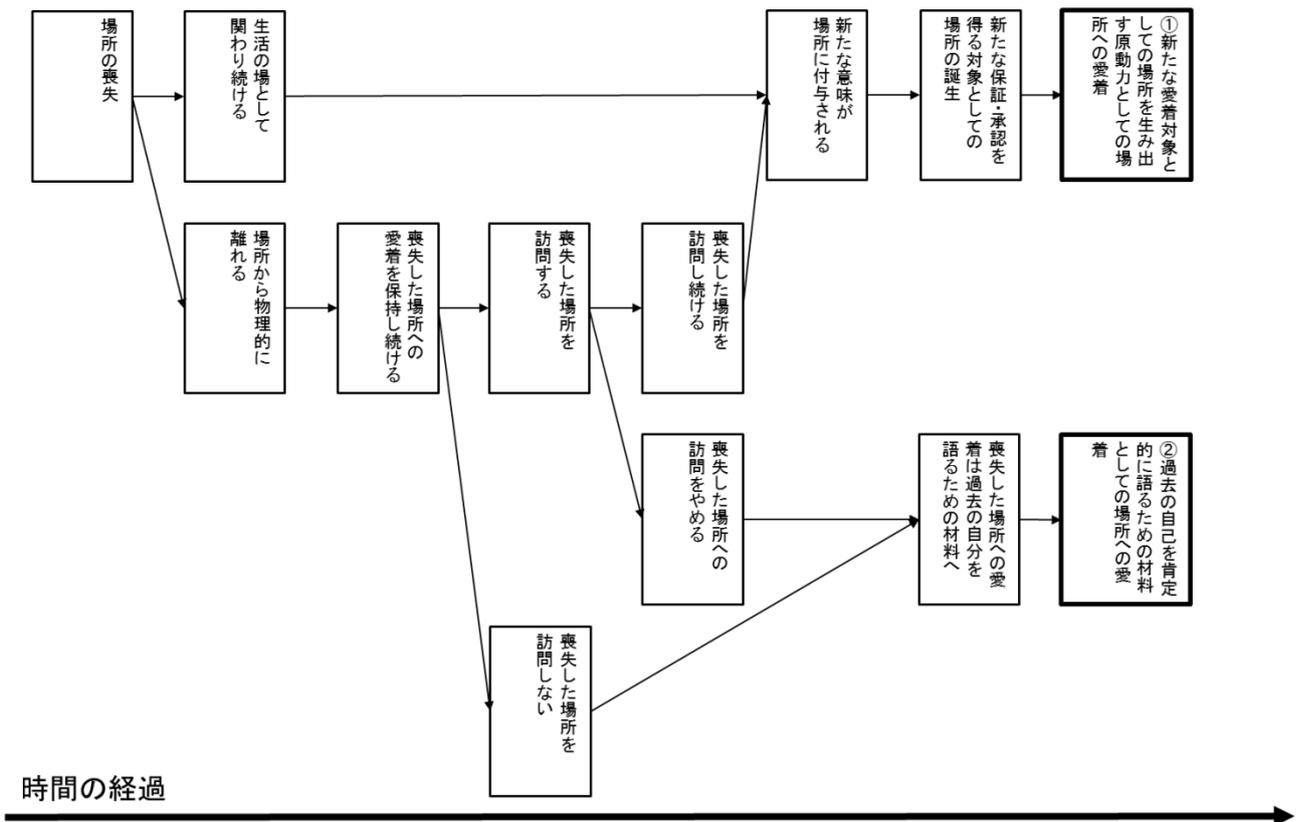
さらに、時間と共に、愛着を抱いていた場所の喪失という事実を主体は受容していくが、その過程において、「場所が喪失した」という事実を目の当たりにすることが、「場所を喪失した」という事実を主体に認識させるための通過儀礼的な役割を担うと推



非可逆的時間

- 等至点 (EFP)
- 必須通過点 (OPP)
- その他の選択や行為
- 語りからは得られなかったが、制度的・論理的に多くの人が通過すると考えられる選択や行為
- 語りから得られた径路
- 語りからは得られなかったが、理論的に存在すると考えられる径路

第2図 調査対象者Aの神戸市灘区との関わり方



第3図 喪失した場所に対する場所への愛着が主体に与える意味

測された。もし、「場所が喪失した」ということを目の当たりにせずに時間が経過してしまえば、「場所が喪失した」という事実の受容により一層時間がかかるか、受容に失敗する可能性がある。

2. 喪失した場所に対する愛着の意味

主体にとっての喪失した場所に対する場所への愛着の大きな意味は、①新たな愛着対象としての場所を生み出すための原動力としての場所への愛着、②過去の自己を肯定的に語るための材料としての場所への愛着の2つに分けられると考えた(第3図)。

①と②のどちらの意味を主体が得るかは、先述した「生活再建の目処をたてる」という等至点における分岐が大きく影響する。①は生活再建を震災前後で変えなかった場合、または、変えたとしても何らかの形で震災前の生活圏に関わり続けていた場合に得られる意味である。それに対して、②は喪失した場所から、物理的に離れてしまった場合に得られる意味である。また、喪失した場所を離れた主体を

惹きつける要因として本稿の調査対象者の語りからは、建造物とその場所に固有の他者の姿があげられた。このことについては、阪神・淡路大震災が都市部で起こったということを考慮する必要があることを指摘しておく。

3. 場所への愛着の再考

本稿において、「場所への愛着」に単なるノスタルジックな人間の場所への感情以上の意味を見出した。場所は、人間の経験によって獲得されるものであり、その場所が喪失した後も、人間の中で喪失した場所に対する場所への愛着は消えることなく、人間の存在や生活を保証し続ける。喪失した場所に対する場所への愛着が、場所の喪失後、主体にとってどのような意味を持つかを先述したが、どちらの意味にも共通する点がある。主体が場所を獲得する過程で、自らの経験を通して空間に意味付けをしていったことを踏まえれば、その経験を否定せず、肯定していることからどちらにも自己愛としての側面

を見出すことのできるものである。つまり、場所への愛着は自己愛の一形態として捉えられるべきではないか、ということが筆者の主張である。

4. 残された課題

本稿における残された課題は大きく以下の3点と考えている。1点目は、本稿において分析対象とした調査対象者は、「神戸市長田区」という共通項を設けて選出したうえ、数が少ない。もちろん本稿が目指したのは数量的な調査ではないが、阪神・淡路大震災で被災した人は「神戸市長田区」のみにいたわけではない。他の地域に住んでいた人、関わっていた人との比較は、喪失した場所と主体との間の関係性の変化の多様性と類似性を検討するにあたって重要であろう。

2点目は、本稿において、明確な世代及び、ジェンダー比較をしていない。また、各世代において、働いていたかどうか、結婚していたかどうか、子どもがいたかどうか等、被災当時の状況を踏まえて検討することで、個人に影響した社会的要因や、地域的要因が明らかになるのではないかと考えている。

3点目は、人文地理学の研究におけるTEMの利点と問題点についての検討である。本稿を執筆するにあたり、筆者は特定の等至点をあえて設定せず、調査対象者に比較的自由に話をしてもらおうというスタイルをとった。しかし、このことによって、調査対象者が「このようなことを聞いて何になるのか」、「あなたが求めていることを話せているのか」等を筆者に尋ねてきた。確かに、研究者の側が聞きたいことを明確化することによって調査対象者とのやりとりはスムーズになるが、あまりにも明確化しすぎると研究者が求めている物語を調査対象者に語らせてしまうというジレンマに陥る可能性がある。恐らく、このジレンマはTEMに限らず人間を対象とした質的研究全てに該当することであると考えられる。

しかし、それでもなおTEMに優れている点があるとすれば、従来のテキスト分析のように、語りの取捨選択が発生しない、または起こりにくいことではないか。TEMが従来の分析方法と大きく異なる

ことは、時間を捨象せず個人の経験を丁寧に追うことができる点である。例えば、KJ法は優れた分析方法であると考えられているが、そこで達成されるのはあくまで隠れた構造の明確化である。つまり、KJ法によるプロセスの記述は、プロセスの構造の明示に過ぎず、過程を追うという目的に対しては最適の方法とは言えない。また、調査対象者の語りの分析という点では、ライフヒストリー法やライフストーリー法と類似するようにも見えるが、TEMはその語りを図式化するところに特徴がある。TEMには、図式化し経験を整理することによって、明確なルートの記述が可能になり通過する「点」が見えるため、調査対象者同士の比較をより正確なものにできるという長所があるということである。さらに、TEMは語りからは得られなかったが、「もしかしたらこういう選択をしていたかもしれない」という「点」を想定し、図式のなかに取り入れることによって、特定の点に調査対象者の経験が集約されなければならないという固定観念に縛られることを回避できるという点も優れている。

TEMは特定の語りを意図的に抽出することなく径路を描くことができるため、まとまらないものや例外とされていた語りを切り捨てることなく全て提示することができる。今後も人文地理学においてTEMを積極的に活用し、その利点と問題点の検討を進めるべきであると考えている。

5. 今後の展望と限界

阪神・淡路大震災から20年以上が経過した現在において、阪神・淡路大震災の個人としての記憶が風化し、「阪神・淡路大震災からの再生・復興」という単一の物語として回収されつつあるのではないかと考えている。それは、Cのように、語り部等の活動を通して、聞き手が求める物語の枠組みにあわせて個人的な語りを取捨選択していった結果生まれる類似性であると考えられる。そのようにして紡ぎ出され、博物館等によって提供される単一化された物語は、後世に向けた教訓となるものであり、決して無駄ではない。しかし、阪神・淡路大震災の裏側には、一言では語りつくせないほど多様な人間と場所との物語

が存在する。記録されないことは、後世には伝わらない。したがって、阪神・淡路大震災を過去のこととするのではなく、今後も被災者の個人的な物語の聞き取りを続け、記録として残すこと自体に価値があると筆者は考えている。また、いつかはその個人的な語りが聞けなくなり、阪神・淡路大震災における場所の喪失の受容過程を追うことが不可能になるときが来る。それが、阪神・淡路大震災による場所の喪失と場所への愛着の関係性を検討することについての最も大きな限界である。

また、場所の喪失と場所への愛着の関係性を検討することで、人間と場所がどのような関係を持つものなのか、そして人間は場所をどのように形成し、場所とどのように付き合っていけば良いのかという問いに対するヒントを得ることができるのではないか。地理学とは単なる地表上の描写に留まる学問ではなく、人間と場所との関係性を検討する学問のはずである。そして、人間と場所との関係を検討する際にキーワードになるのは、場所への愛着であり、その概念の解釈の再考は、人文地理学という人間と場所との関係性を研究する学問領域において、今後も続けていく必要があると筆者は考える。

付記

本稿は、2017年1月に神戸大学大学院人間発達環境学研究科に提出した修士論文に修正を加えたものである。本稿を作成するにあたって調査に協力していただいた方々、さらに本稿をまとめるに際してご指導いただいた神戸大学大学院人間発達環境学研究科の澤宗則教授に記して感謝する。

(きしま きょうこ

神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

引用文献

- 阿部一 (2001): 竹内啓一・杉浦芳夫編『20世紀の地理学者』, 古今書院, pp.222-230.
- 相澤亮太郎 (2002): 神戸をめぐる場所への愛着: ライフヒストリーとエッセイからの場所愛抽出, 兵庫地理 47, pp.23-32.
- 相澤亮太郎 (2008): 『場所と記憶の地理学—災害空間の受容

- と場所の再構築—』, 神戸大学大学院文化科学研究科博士学位論文, www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/d1/D1004474.pdf
- Bachelard, G.(1942): *L'eau et les rêves: essai sur l'imagination de la matière*, Paris: J. Corti, バシユラール, ガストン (及川馥訳)(2008): 『水と夢: 物質的想像力試論』, 法政大学出版局
- Bachelard, G.(1957): *La Poétique de l'espace*, Paris: Presses Universitaires de France, バシユラール, ガストン (岩村行雄訳)(2002): 『空間の詩学』, 筑摩書房
- Belk, R. W.(1988): Possessions and the extended self. *The Journal of Consumer Research*, 15, pp.139-168.
- Bonanno, G., Kaltman, S.(1999): Toward an integrative perspective on bereavement. *Psychological Bulletin*, 125(6), pp.760-776.
- Bowlby, J.(1969): *Attachment and loss. Vol.1, Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973): *Attachment and loss. Vol.2, Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J.(1977): The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychology*, 130, pp.201-210.
- Bowlby, J. (1980): *Attachment and loss. Vol.3, Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J.(1988): *A secure base*. New York: Basic Books.
- Cox, H.(1968): The restoration of a sense of place, *Ekistics* 25, pp.422-424.
- Davis, C. G., Nolen-Hoeksema, S. N., Larson, J.(1998): Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. *Journal of Abnormal Psychology*, 75, pp.561-574.
- 遠藤利彦 (2005): アタッチメント理論の基本的枠組み, 数井みゆき・遠藤利彦編, 『アタッチメント—生涯にわたる絆』, ミネルヴァ書房, pp.1-31.
- 遠藤利彦 (2007): 第1章アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する, 数井みゆき・遠藤利彦編, 『アタッチメントと臨床領域』, ミネルヴァ書房, pp.1-58.
- Fried, M.(1963): Grieving for lost home. In L. J. Duhl (Ed.), *The Urban Condition: People and Policy in the Metropolis*, New York: Simon & Schuster.
- Giuliani, M. V.(1991): Towards an analysis of mental representations of attachment to the home. *The*

- Journal of Architectural and Planning Research, 8, 2, pp.133-146.
- Goldberg, S., Grusec, J., Jenkins, J.(1999) : Confidence in protection : arguments for a narrow definition of attachment. Journal of Family Psychology, 13, pp.475-483.
- 池内裕美・藤原武弘・土肥伊都子 (2000) : 拡張自己の非自発的喪失 : 大震災による大切な所有物の喪失調査結果より, 社会心理学研究 16(1), pp.27-38.
- 川喜田二郎 (1970) : 『続・発想法—KJ法の展開と応用』, 中央公論社
- 熊谷圭知 (2013) : 場所論再考 : 他者化を越えた地誌のための覚書, お茶の水地理学 52, pp.1-11.
- Lifton, R. J.(1967) : Deth in Life : Survivors of Hiroshima , New York : Random House
- Massey, D. (1993) : Power-geography and progressive sense of place. In Bird, J. et al eds. Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change. Rutledge, pp.56-69.
- 森 直久 (2009) : 回顧型/前向型 TEM 研究の区別と方法的問題, サトウタツヤ編 (2009), 『TEM では始める質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして』, 誠信書房, pp.153-157.
- 遠城明雄 (1998) : 都心地区の衰退と「まちづくり」活動をめぐって, 荒山正彦・大城直樹編, 『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』, 古今書院, pp.212-225.
- Relph, E.(1976) : Place and Placelessness, London: Pion, レルフ, エドワード (高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳) (1991) : 『場所の現象学 : 没場所性を越えて』, 筑摩書房
- サトウタツヤ編 (2009) : 『TEM では始める質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして』, 誠信書房
- サトウタツヤ (2012) : 第 2 節 質的研究をする私になる, サトウタツヤ・安田裕子編 (2012), 『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開』, 誠信書房, pp.4-11.
- 鈴木猛康 (2013) : 福井地震で設定された震度 7 : 南海トラフ想定で自治体に関心 (事例に学ぶ自治体防災), 日経グローバル 230
- 滝浪章弘 (2005) : 『遠い風景—ツーリズムの視点—』, 京都大学出版
- Tuan, Yi-Fu.(1961) : Topophilia: or sudden encounter with the landscape. Landscape, 11, pp.29-32.
- Tuan, Yi-Fu.(1974) : Topophilia: A Study of Environmental Perception, Attitudes and Values, Prentice-Hall, Tuan, Yi-Fu.(1990), Topophilia: A Study of Environmental Perception, Attitudes, and Values, Columbia University Press, トゥアン, イーフー (小野有五・阿部一訳) (1992) : 『トポフィリア : 人間と環境』, せりか書房
- Tuan, Yi-Fu. (1977) : Space and place : the perspective of experience, London : Edward Arnold, トゥアン, イーフー (山本浩訳)(1988) : 『空間の経験 : 身体から都市へ』, 筑摩書房
- Tuan, Yi-Fu. (1986) : Morality and Imagination : Paradoxes of Progress, Madison : The Univ. of Wisconsin Press, トゥアン, イーフー (山本浩訳)(1991) : 『モラリティと想像力の文化史—進歩のパラドクス』, 筑摩書房
- von Bertalanffy, L. (1968) : General System theory : foundations, development, applications. G. Braziller, フォン・ベントランフィ, L(長野敬・太田邦昌訳)(1973) : 『一般システム理論—その基礎・発展・応用』, みすず書房
- Weil, S.(1955) : The Needs for Roots, Boston: Beacon Press, ヴェイユ, シモーヌ (富原眞弓訳)(2010) : 『根をもつこと : 上下』, 岩波書店
- Zisook, S., Chentsova-Dutton, Y., Schuchter, S. R.(1998) : PTSD following bereavement. Annals of Clinical Psychiatry, 10, pp.157-163.

¹ 1948年6月28日に発生した福井地震による激震と被害の衝撃が大きく、この地震を契機として気象庁の震度階級が見直され、震度7が制定された。震度7の定義は、家屋の倒壊が30%以上、山崩れ、地割れ、断層等が生じるというものであった(鈴木, 2013)。

² 2004年の新潟県中越地震、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震。

³ Tuan (1974) は、人間の所有物は人格の延長であるとして、それを奪われることは、自分自身の心の中

で、人間としての価値が下落することとする。そして、人間が情緒的な生活のいくらかを家に向けたり、隣近所に向けたりすることを指摘し、最上位ではないにせよ、家や隣近所を、愛着を抱く対象としている。⁴内省に基づく地理学を樹立した Tuan (1986) は、イギリスの小説家アイリス・マードック、フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユ、ウィーン生まれの哲学者ルードウィヒ・ウィトゲンシュタインの3人の著作と生き方に多くを負っていると述べている。